

現代
語譯 日本古典文學全集

物語遺拾治 集聞著今古

明 安 積 永
次 貞 古 市



河 出 書 房

現代語譯 日本古典文學全集

昭和三十年十二月十日再版發行



宇治拾遺物語
古今著聞集

定價 貳百九拾圓
地方定價 參百圓

永積安明
市古貞次

著者
發行所
東京都千代田區神田小川町三ノ八
河出孝雄

印刷者
東京都文京區戸崎町七一
小泉輝章

發行所
株式會社
河出書房

東京都千代田區神田小川町三ノ八
振替口座 東京 一〇八〇二
電話 東京 (29) 代表 三七二一

印刷 小泉・製本 文勇堂

目次

宇治拾遺物語

まえがき……………三

序……………五

卷 第 一

一	道命阿闍梨、和泉式部のもとで讀經の事……………七
二	丹波國篠村に平茸はえる事……………七
三	鬼に癪とられる事……………八
四	伴大納言の事……………二
五	隨求陀羅尼の額にこめた法師の事……………二
六	法師の玉壺をさすり出す事……………三
七	龍門の聖、鹿の身がわりになる事……………三
八	占いの上手、黄金をとりだす事……………四
九	秦兼久、通俊卿に向かつて惡口の時……………六
一〇	雅俊、一生不犯の鉦打たす事……………七
一一	かい餅に呼ばれ、空ねいりする兒の事……………七

卷 第 二

一二	田舎の兒、櫻の散るを見て泣く事……………六
一三	小藤太、鰐におどされる事……………六
一四	大童子、鮭を盗む事……………九
一五	尼、地藏を拜む事……………三
一六	修行者、百鬼夜行にあり事……………三
一七	利仁、芋粥の事……………三
一	清德聖、奇特の事……………六
二	金峯山と笏打の事……………六
三	厚行、死人を家から出す事……………三
四	晴明、藏人少將をまもる事……………三
五	季通、わざわいに逢おうとする事……………三
六	袴垂、保昌に逢う事……………三
七	明衡、わざわいに逢おうとする事……………六

卷第三

八	唐土の卒塔婆に血をつける事	三八
九	業村 強力の學士にあり事	三九
一〇	柿の木に佛あらわれる事	四一
卷第三		
一	盗人大太郎の事	四三
二	藤大納言忠家の女 放屁の事	四四
三	小式部内侍 定頼卿の經に感動の事	四五
四	山伏 舟を祈りかえす事	四六
五	鳥羽僧正 國俊とたわむれる事	四七
六	繪佛師良秀 家の焼けるを見て喜ぶ事	四八
七	虎 鰐を捕える事	四九
八	樵夫の歌の事	五〇
九	伯の母の事	五〇
一〇	同人 佛事をいとなむ事	五三
一一	藤六の事	五三
一二	伏見修理大夫俊綱の事	五三
一三	長門前司の娘 葬送の時わが家に歸る事	五四
一四	雀 恩を返す事	五五
一五	小野篁の廣才の事	五九

卷第四

一六	一條攝政 歌の事	五九
一七	狐 家に火をつける事	六〇
卷第四		
一	狐、人に憑いて菜を食う事	六三
二	佐渡の國には金があるという事	六三
三	藥師寺の別當の事	六三
四	石橋の下の蛇の事	六四
五	東北院の菩提講の聖の事	六六
六	三河入道 遁世の事	六七
七	進命婦 清水もうでの事	六八
八	篤昌・忠恒らの事	六九
九	永超僧都 魚を食う事	七〇
一〇	慈恵僧正 戒壇を築く事	七〇
卷第五		
一	四の宮河原の地蔵の事	七三
二	伏見修理大夫のもとに殿上人おしかける事	七三
三	以長 物忌みの事	七五
四	範久阿闍梨 西方をうしろにせぬ事	七四

卷 第 六

五	陪從家綱兄弟、互いにだましあう事……………	七六
六	陪從清仲の事……………	七六
七	假名曆を註文の事……………	七六
八	實子のよそおいする人の事……………	七六
九	御室戸僧正ならびに一乗僧正の事……………	八〇
一〇	氷魚を盗みぐいする僧の事……………	八二
一一	仲胤僧都、説法の事……………	八二
一二	小式部内侍、大二條殿に歌よみかける事……………	八三
一三	横川の賀能地藏の事……………	八三
一	廣貴、妻の訴えで閻魔の廳に召される事……………	八五
二	世尊寺で死人を掘り出す事……………	八六
三	留志長者の事……………	八七
四	雙六に二千度參詣の果を打ち入れる事……………	八八
五	觀音經、蛇となつて人を助け給う事……………	八九
六	賀茂の社より紙・米等を給う事……………	九一
七	信濃國筑摩の湯に、觀音沐浴し給う事……………	九二
八	帽子の翁、孔子と問答の事……………	九三
九	僧伽多、羅刹の國に行く事……………	九四

卷 第 七

一	五色の鹿の事……………	九八
二	長谷寺に參籠の男、利生にあずかる事……………	九八
三	小野宮大饗の事並びに西宮殿・富小路大臣等大饗の事……………	一〇五
四	式成・源滿・則員等三人、弓藝の事……………	一〇六

卷 第 八

一	大膳大夫以長、前驅の事……………	一〇七
二	下野武正、大風雨の日、法性寺殿にまいる事……………	一〇八
三	信濃國の聖の事……………	一〇八
四	敏行朝臣の事……………	一一三
五	東大寺、華嚴會の事……………	一二六
六	獵師、佛を射る事……………	一二七
七	千手院僧正、仙人にあう事……………	一二八
一	寶志和尚の御像の事……………	一二九
二	敦賀の女を、觀音助け給う事……………	一二九

卷 第 九

一	寶志和尚の御像の事……………	一二九
二	敦賀の女を、觀音助け給う事……………	一二九

卷第十

- 三 くうすけの佛供養の事……………一四
 四 つねまさの郎等の佛供養の事……………一七
 五 歌をよんで罪ゆるされる事……………一九
 六 大安寺別當の女に通う男、夢見の事……………二九
 七 博打、聲入の事……………三〇

卷第十一

- 一 伴大納言、應天門を焼く事……………三三
 二 播磨守佐大夫の事……………三四
 三 東ひと、いけにえをとどめる事……………三五
 四 豊前王の事……………三六
 五 藏人頼死の事……………四〇
 六 小槻當平の事……………四一
 七 海賊發心して出家する事……………四三
- 一 青常の事……………四六
 二 盜賊保輔の事……………四七
 三 晴明を試みる僧の事、並びに晴明蛙を殺す事……………四八
 四 頼信、忠恒を攻める事……………四九

卷第十二

- 五 白河法皇の北面、受領下國の眞似する事……………五一
 六 得業惠印、猿澤池の龍の事……………五一
 七 清水寺で御帳を給わる女の事……………五三
 八 空入水する僧の事……………五四
 九 日藏上人、吉野山で鬼にあう事……………五五
 一〇 保昌、政經の父にあう事……………五六
 一一 出家の功德の事……………五六
- 一 達磨、天竺の僧の修行を見る事……………五六
 二 提婆菩薩、龍樹菩薩のもとに參る事……………五六
 三 慈恵僧正、受戒の日をのぼす事……………五六
 四 持經者叡實、效驗をあらわす事……………五六
 五 空也上人の臂を觀音院僧正祈りなおす事……………五六
 六 聖寶僧正、一條大路を渡す事……………五六
 七 穀斷の聖、不實をあらわす事……………五六
 八 季直少將の歌の事……………五六
 九 樵夫の小童、隱題の歌をよむ事……………五六
 一〇 高忠の侍、歌よむ事……………五六
 一一 貫之の歌の事……………五六

卷第十三

一	上緒の主が金を得た事	一五
二	元輔、落馬の事	一六
三	利延、迷わし神にあらう事	一六
四	龜を買取り放す事	一七
五	夢買う人の事	一八
六	大井光遠の妹、強力の事	一八
七	ある唐人、羊に生まれたわが女を殺す事	二二
二	東人の歌の事	一六
三	河原院に融公の靈の住む事	一六
四	八歳の童子、孔子と問答の事	一七
五	鄭太尉の事	一七
六	佛性を悟って富み榮えた貧俗の事	一八
七	宗行の郎等、虎を射る事	一八
八	遣唐使の子、虎に食われる事	一九
九	ある上達部、中將のとき召人にあらう事	二〇
一〇	陽成院の化物の事	二〇
一一	水無瀬殿のむささびの事	二一
一二	一條棧敷の鬼の事	二二

卷第十四

八	出雲寺別當、鯨に生まれた父を知りながら殺して食う事	一八
九	念佛の僧、魔往生の事	一九
一〇	慈覺大師、額額城に入り給う事	二〇
一一	天竺に渡る僧、穴に入る事	二一
一二	寂昭上人、鉢を飛ばす事	二二
一三	清瀧川の聖の事	二三
一四	優婆塞多の弟子の事	二四
一	海雲比丘の弟子の童兒の事	二五
二	寛朝僧正、勇力の事	二六
三	魚養の事	二七
四	新羅國の后、金の櫛の事	二八
五	北面の女雑仕、六の事	二九
六	仲胤僧都、連歌の事	三〇
七	大將、つつしみの事	三一
八	御堂關白の御犬、晴明等奇特の事	三二
九	高階俊平の弟の入道、算術の事	三三

卷第十五

古今著聞集

一	清見原天皇、大友皇子と合戦の事……………	二〇三
二	頼時、胡人を見る事……………	二〇五
三	賀茂祭の歸りに武正・兼行御覽の事……………	二〇六
四	門部の府生、海賊を射返す事……………	二〇七
五	土佐判官代通清、人違ひして關白殿にあ い奉る事……………	二〇八
六	極樂寺の僧、仁王經の驗を施す事……………	二〇九
	ま え が き……………	二二二
	義時は武内宿禰の生れかわり……………	二二五
	盲目の前世……………	二二五
	行基菩薩の昆陽寺建立……………	二二六
	觀音經の功德……………	二二七
	率分堂に草茂る……………	二二七
	道理の船と非道の船……………	二二八
	橋 わたはな 直幹の秀句……………	二二八

七	伊良縁の世恒に毘沙門御下文の事……………	二二〇
八	相應和尚、都率天に上る事、並びに染殿 の后を祈り奉る事……………	二二一
九	仁戒上人、往生の事……………	二二三
一〇	秦の始皇、天竺より來た僧を禁獄の事……………	二二四
一一	後の千金の事……………	二二五
一二	盜跖、孔子と問答の事……………	二二五
解	說……………	二二九

	大江朝綱の秀句……………	二二九
	基俊と子供との連歌……………	二三九
	詩・歌の二船……………	二四〇
	三船の才……………	二四〇
	能因法師の雨乞い、白河の歌……………	二四一
	女が石清水に參つて歌を詠み、神徳をうけた こと……………	二四二
	小式部内侍……………	二四二

望天石の故事	二四三
松浦佐夜姫	二四三
小野小町の盛衰	二四四
まだふみも見ず天の橋立	二四四
能は歌よみ	二四五
笙の秘曲	二四六
筆跡の争い	二四七
清水寺の額	二四八
早瓜の毒	二四八
九條兼實の人相	二四九
赤染衛門母子の愛情	二四九
養老の孝子	二五〇
禁斷の魚	二五一
父に打たれる	二五二
出家後も子を思う	二五三
敦兼の朗詠	二五五
小侍従の懺悔物語	二五四
なよ竹物語	二五五
蟲の音	二六〇
頼光と鬼同丸	二六〇

衣のたて	二六二
雁の列	二六二
義家と宗任	二六三
渡邊一番	二六四
的になった家來	二六六
みさごと鯉	二六六
大力の女	二六七
金岡の馬の繪	二六九
烏羽僧正	二六九
繪そらごと	二六九
繪難房	二七〇
天竺冠者	二七〇
音楽を聞いて改心した盗人	二七三
女盗人	二七三
灰を食べた盗人	二七四
強盜小殿	二七五
安養の尼	二七九
空也上人と子供	二八九
西行法師と徳大寺家	二九〇
馬允と小冠者	二九一

あばれ馬「六の葦毛」	二六二
膽だめし	二六二
人喰い犬と隨身	二六三
假名のよみ違い	二六四
たつみの權守の對決	二六五
進士定茂の事	二六五
へひりの判官代	二六六
法師の小便	二六七
泣き 尼	二六八
いい加減な男	二六八
用意のよすぎた男	二六九
佐實のもとどり	二六九
狸の怪	二七〇
天狗退治	二七〇
狐の命乞	二七〇
助康と古狸	二七〇
餅を食べられた居眠の僧	二七〇

中納言の大食	二七八
飛梅	二七八
猿の生れかわり	二八九
狐と同宿した男	二九〇
蟹の恩返し	二九〇
猫の行方	二九二
針を恐れる蛇	二九三
しらみのたたり	二九三
猿が寫經を助けようとした事	二九三
殺された蛇の執念	二九四
卷貝の哀願	二九五
鴛鴦の別れ	二九五
母猿の愛情	二九六
死後、馬となる	二九六
本妻の嫉妬	二九七
北叟の馬	二九八
解説	二九九

宇治拾遺物語

ま え が き

一、この本のテキストには、萬治二年版の流布本をもちいたが、流布本で解釋のできないところ、誤脱とおもわれるところは、古活字本あるいは宮内廳書陵部藏本等によった。

一、頁數の關係もあつて、全譯にすることはできなかったが、とりあげた各説話については抄譯せず、完全譯にした。

一、省略した説話は、全卷のうち、流布本の數えかたで、つぎの諸段、卷一の九、卷二の二・三・五・七段、卷三の十二・十三・十八段、卷四の四・九・十一・十二・十三・十四・十六段、卷七の二・三・四段、卷九の一段、卷十の二・三・四段、卷十一の八段、卷十二の四・七段、卷十四の三・六段、合計二十七段にあたる。卷五・卷六・卷八・卷十三・卷十五は、完全譯である。つまり流布本の十五卷、百九十六段のうちから、前記の二十七段をのぞいた百六十九段の全譯ということになる。

一、口語譯は、なるべく原典にしたがい、逐語譯に近いものとしたが、古語のままのほうが、かえって原文の味わいを理會しやすいとおもわれる部分は、おもいきって原文をそのままにしておいたところがある。また現代口語譯の性質上、ばあいによっては、直譯をさけたところもある。

一、本文中の和歌は、原則として、そのままにしたが、難解なものは、註記の形で大意をしるしたり、語釋をほ

どこしたりした。

一、註記は、この全集の性質上、わずらわしくない程度に、なるべく簡略に、大意をしるすにとどめた。

一、この本の目次や各巻説話の内題は、それぞれ適當に口語譯しておいたし、目次の番號も本書だけのものであるから、原典を参照されたい方は、本文各段の終りにしるしてある原典のままの内題によって、原文をひき出されたい。

一、この本の作製にあたっては、大島建彦氏から、多くの助力をえた。記して感謝の意を表したい。

序

世に『宇治大納言物語』という書物がある。この『大納言』というのは、本名を隆國たかくにという人物だ。西宮左大臣殿の孫で、俊賢大納言としかたからみれば第二の子息にあたる。年をとってからのちは暑さたかくにをいとい、暇をこらうて、五月から八月までの間、平等院一切經藏せきひょうどういんいつきやうぞうの南の山際ざい、南泉房なんぜんぼうというところにもつておられた。そこで地名にちなんで『宇治大納言』と申しあげたのである。髻もどりを結びまげた奇妙な恰好で、薙むしうを板にしいて涼んでいて、大きなうちわでもってあおがせなどしながら、往來の者を、身分の高下にかかわらず呼び集め、むかし物語をさせて、自分は家内に臥しながら、物語るままに、大きな草紙に書きとられた。天竺の話もあり、大唐の話もあれば、日本のことも出てくる。その中には、貴い話もあり、あわれな話もあり、きたない話もあり、少々はうそ話もあれば、時になかなか巧みな話もあるという次第で、種々さまざまの話がまじっている。世の人は、おもしろがってこの書物を讀んだ。あとさきすべて十五帖である。その原本は傳わって、侍從俊貞しうてんという人のもとにあった。それはどうなったのであろうか。後のさかしい人々が書き入れをしたために、物語の分量も多くなってしまった。なにしろ大納言死後のことまで書き入れた本もあるくらいだ。ところが、いまの世にいたって、またあらたに物語を書き入れた書物が出て來た。たぶん、かの大納言の物語にもれたものを拾い集め、さらにのちのことなど書き集めたのであろう。名づけて『宇治拾遺しゅういの物語ものがたり』という。宇治にのこった物語を拾うという意味でかようにつけたのであろうか。あるいは侍從の唐名を拾遺しゅういというので『宇治拾遺物語』と呼んだのであろうか。そのあたりの區別は知りたい。さてもおぼつかないことである。

2 1 註

源高明（醍醐天皇の皇子）。
山城國（京都府）宇治の平等院にある一切經を収めた藏。